

スペインからくり出張記

伊達コミュニケーション研究所

客員研究員 溝口正成

今般、名古屋ミネルバ（人形劇団）主宰の千田靖子さんのお誘いで、スペイン・バスク地方のサン・セバスチャンで開催された世界人形フェスティバルに、九代玉屋庄兵衛さんのからくりを中心に出演するという事で5月27日から6月7日まで参加出張しました。

出発前に、現地の歴史・文化に関して簡単にネットで検索しました。例えば1960年代には日本の著名な民俗学者である梅棹忠夫・桑原武夫がバスク地方の生活を現地調査した事、1980年代には司馬遼太郎が著書「街道をゆく〜南蛮のみち」において、フランシスコ・ザビエル（生誕地はバスク地方）に南蛮文化のルーツを求め、バスクブームを起こした事。

また、1930年代には天才画家ピカソがスペイン内戦中にフランコの反乱軍に乗じてナチスドイツ空軍がゲルニカ（バスク自治の聖地）を空爆した事に抗議し、ゲルニカの壁画を製作し、後に国連本部の安全保障理事会議場前に展示されるようになった、といった歴史も含めて予習して参りました。

現地におきましては、バスクの人々は自身の文化に強い誇りを持っているのが良く分かりました。彼らはバスク語を話し、原則スペイン語は使いません。国旗も、バスクのものばかりでスペイン国旗は一つも見かけませんでした。サン・セバスチャンという地名もスペイン語で、彼らはバスク語の名称であるドノスティアと呼びます。陸続きのヨーロッパでは、他国を支配し、逆に他国から支配され、王朝が変わり、国境線も変わる歴史の流れの中で、民族のルーツとしての文化（特に言語）にこだわるのは当然の事なのでしょう。私たち日本人は、自国が島国で外国に支配された歴史はほとんどない風土のため、明らかな違いを感じさせるかもしれませんが、明治維新後に外来の文化を安易に取り入れてきた弊害として、自身のルーツを大切にしないのも問題があるのでは…と、伝統文化に携わるものとしては思わざるを得ません。

サン・セバスチャンの町は、EUの文化首都と言われるだけあって、世界各地から観光客で賑わう美しい町でした。食文化が豊かで世界的なイベントが年中開催されています。バスクの人々は困難な歴史を経て、様々な文化を認める中で自身の文化を理解してもらおうと試みているかのようにでした。人々は穏やかで親切な人が多く、大変居心地の良い町です。さて本編の「からくり」の話ですが、「世界人形フェスティバル」には41団体が参加しました。初日はマリア・クリスティーナなど王侯貴族が使用したミラマール宮殿の庭園で公演してもらいました。

翌日の地元新聞には、多くの参加団体がある中で3枚の写真入りの記事が掲載されましたが、そのうち2枚は「からくり」の写真でした。日本のからくりがヨーロッパの人々と

って珍しく、素晴らしい人形と捉えられたのでしょう。参加人形劇の多くは、マリオネットやパペットがほとんどです。日本のからくり人形はそれらとは明らかに異質で、技術的にも優れたものです。

しかし共通点も多くあります。例えばマリオネットは、日本のシンプルなからくり人形とほぼ同じ仕掛けです。下から操るか上から操るかの違いだけです。両手・両足・頭を7、8本の糸で上手に操ります。人形の素材も木です。糸を集約する撞木（しゅもく）も使われています。しかし1人の操り手が極めて巧みに操作し、2人1組で人形劇を演じます。また日本では祭礼時に町内の方（アマチュア）が操り方となりますが、ヨーロッパではプロのジプシーが操ります。普及度、認知度は日本の比ではありません。

最終日には町の中心部にある公園のステージで上演しました。ステージ前の観客は300人ほどでしたが、その周りのオープンカフェの人々も好奇の眼差しで皆見ていましたので、合せて700～800人の観客に見ていただきました。

日本の伝統文化が異国の地で大評判でしたが、名古屋を中心としてからくり文化圏の人々がもっと自身の持っている文化に注目して欲しいものです。